

令和7年度 教育課程特例校実施状況（自己評価・学校関係者評価）

1 教育課程特例校としての取組		本校では、平成26年度から平成29年度に研究開発学校の指定を受け、小学校の全学年におけるグローバル人材を育成するための外国語活動・英語科のカリキュラム開発を行った。それらの研究成果を基盤として、教育課程特例校の指定を受け、中学年における総合的な学習の時間を25時間縮減し、外国語活動を25時間増設した教育課程を編成することで、異文化理解や平和学習などに関わるコミュニケーション活動を発展的に展開するカリキュラムを実施する。
2 自己評価	(1) 成果	○「英語『を』学ぶ力と英語『で』学ぶ力を一体的に育む授業開発」という研究課題を設定し、CLIL（内容言語統合型学習）の視点を取り入れた教材開発や、児童の実態（会話を続けることの難しさ、読み書きの課題等）をふまえた授業実践に取り組むことで、教科内容と一体化した英語力を培うことができた。 ○3～6学年において、海外の学校3校と主にビデオレターを通じた交流活動を実施し、英語運用能力の向上と異文化理解の深化を図った。
	(2) 課題	○各学年における目標や内容を再確認した上で、系統性を見通したカリキュラムを開発していくことが求められる。特に、「読むこと」に関しては個人差が大きいため、段階的にそれらの素地を育むための指導方法を確立する必要がある。 ○パフォーマンス評価等の評価方法を確立するとともに、授業実践そのものに対する評価についても、結果の分析や考察を含めて丁寧に実施する必要がある。
	(3) 評価	【B】※評価はA（十分に成果があった）、B（成果があった）、C（やや成果があった）、D（成果がなかった）
3 学校関係者評価	(1) 意見	○今のグローバルな時代に、外国の方との交流の中で自分の意見を伝えていけるようになって考えると、必要で良い取り組みだと感じた。 ○常に工夫して取り組む姿勢が先生方にあれば、きっと子ども達にもいい影響があるので、これからも様々にチャレンジしてほしい。 ○短期的な視点で進めるのではなく、今後の大きな取り組みの第一歩として確実に進めながら検証していただきたい。 ○新しい試みで評価できると思うが、その先どのように変化して成長していくか追っていく必要がある。 ○英単語の定着が不十分な子どもが理解できる授業になっているのか。 ○国語力が発達していない中、英語に時間を割くことに疑問を感じる。時間配分をしっかりと考えていただきたい。 ○これだけの資料では、どう評価してよいかわからない。
	(2) 評価	【B】※評価はA（十分に成果があった） B（成果があった） C（やや成果があった） D（成果がなかった）